

令和2年度常任委員会視察研修について報告いたします。

今年度は、教育民生委員会が主催となり、御宿町が誇る「国の天然記念物」であり、絶滅危惧種にも指定されているミヤコタナゴの保護に関する施設及び取組みを視察しました。

1) 観音崎自然博物館

公益社団法人 観音崎自然博物館は、照葉樹の豊かな森と東京湾唯一の岩礁海岸に囲まれた多様性に富んだ自然を有する神奈川県立観音崎公園（横須賀市）の中に立地し、東京湾集水域および三浦半島の“リアルな自然と生態”をテーマに、様々な生物を展示している博物館です。前館長である故・石鍋壽寛氏はミヤコタナゴの増殖と生息地保護に尽力された方で、ミヤコタナゴの生息地である御宿町と非常に深い縁があり、観音崎自然博物館は、御宿町のミヤコタナゴの保護活動だけでなく、町内の小学生を対象とした自然観察会など様々な形で継続的にご協力を頂いています。

観音崎自然博物館では、国や自治体からの依頼を受け、地域別にミヤコタナゴの水槽内での増殖・保存を行うと同時に、タナゴ類が卵を産み付けるマツカサガイ等の淡水二枚貝の野外調査などが行われています。ミヤコタナゴの保護・増殖をしていく上で、タナゴ類が生息できる環境の維持は重要ですが、タナゴ類の産卵床となる二枚貝が生息できる環境を確保することがカギとなってくるとのことです。現在、水槽でのミヤコタナゴの増殖技術は確立されていますが、自然環境下でミヤコタナゴと二枚貝の生息環境を同時に保つことが非常に難しく、一時的にその場でミヤコタナゴが生息できても、複数世代に渡ってミヤコタナゴが生息し続ける環境の保全は、全国のどの生息地でも難航しており、自然環境下でミヤコタナゴの生息環境を保全していく場合、複数の自然分野の専門家からアドバイスを受け、周辺の森林を含めた自然環境全体を改善していく必要があるとのご提言を頂きました。また、二枚貝の増殖に関しては、成功例が少ないものの、他自治体での取組みにおいて一定の成果が上がっているとの話があり、こういった事例を参考にしながら、早急に町内での二枚貝の増殖に着手する必要があると感じました。

なお、御宿系統のミヤコタナゴに関しては、東京・武蔵野市の井の頭自然文化園を筆頭に、複数の拠点で十分な数の個体数が確保されていることから、観音崎自然博物館では今後は別系統の保存に注力していく予定とのことです。

2) 某所における生息環境復元の取組み（※密漁防止の観点から、詳細は記述しません）

ここでは、自然絶滅してしまったミヤコタナゴ生息地の復元を目指し、人工的に環境を整えつつもなるべく自然に近い環境下で保護する取組みが継続されています。現在は、自治体が民間団体に事業を委託し、ミヤコタナゴが生息できるよう環境を復元したため池とその周辺の草木などの整備を行い、水槽内で維持していたミヤコタナゴを放流し、生息状況の調査等が行われています。この事業には大学で専門的な研究をされている学生の参画もあり、今回の視察では、現場をまわりながら実際に事業に携わっている団体職員や学生から日々の活動等について説明を聞くことができました。彼らの話には、地道なフィールドワークに裏付けられたしっかりとした知識が感じられ、また、彼らのミヤコタナゴにかける熱意がひしひしと伝わってきました。水の中だけでなく、周辺の森の草木や地面の下の世界まで気を配りながら事業が進められており、「環境全体を改善していく」ことを実践されていることがよく理解できました。

また、希少生物を取り扱う事業であることから、密漁を防ぐためにも、パトロールや情報の漏えい・拡散などへの対策も行われており、今後の御宿町でのミヤコタナゴの保護活動を考える上で具体的な事例となる大変参考になる話を伺うことができました。

3) 視察研修を振り返って

ミヤコタナゴは、かつては水田や水路など、人間の生活のすぐ近くに生息していた生き物ですが、里山の荒廃や農業の近代化等、時代の変化による影響から数が激減し、さらには、ここ近年問題となっているイノシシ等の野生動物の増加、気候変動の激化など、新たな脅威にも晒され続けています。

現在の御宿町のミヤコタナゴの生息地は山間に位置しており、自然の中で山林が正常に機能していれば、雨が降ったとしても山がスポンジのように水を吸収し、ミヤコタナゴや2枚貝の生息に必要なきれいな水を供給してくれますが、現在は周辺の山林の荒廃によって大雨のたびに生息地が土砂に埋まり、ミヤコタナゴだけではなくタナゴ類が世代を超えて生息し続けるために必要な産卵床となる2枚貝が全滅してしまう環境にあると、長年御宿のミヤコタナゴの保護に携わっている方から伺いました。まさに町の宝である「御宿のミヤコタナゴ」は風前の灯火だと言えます。

さらには、本来、人間の生活のすぐそばに棲む生き物が危機に瀕しているということは、そこに住まう住民の生命も危険にさらされる環境になってしまっているとも言換えられるのではないのでしょうか。

今回の視察研修では、御宿のミヤコタナゴを守っていくために様々な示唆を得ることができ、重要と思われる3点につき、以下に整理しました。

- ① ミヤコタナゴそのものよりも、まずは産卵床となる二枚貝が住み続けられるような周辺環境を整えることが肝要であり、そこが一番難しいところでもある。複数分野の専門家の知見を得ながら、また他所での成功事例に学びながら、環境整備に注力していくべきであること。
- ② 自然環境下でのミヤコタナゴの寿命はおおむね1年で、産卵床となる2枚貝がいなくなれば、その場所に棲むミヤコタナゴは死滅することを意味している。一か所の生息地のみ手を入れることは非常にリスクが高いため、並行して別の場所での生息地復元も検討すべきであること。またその際には、水田環境だけでなく‘ため池’のような場所も有力な選択肢となりうること。
- ③ 民間団体や学生など若い世代にも参画して頂き、日々の地道な活動を継続していくための組織づくりが必要であること。また、こういった活動にボランティア参加したいという意欲を持った方が大勢いらっしゃること。

ミヤコタナゴは、国の天然記念物かつ、絶滅危惧種に指定されており、御宿町はミヤコタナゴを守り後世に伝えていかななくてはならないという法律に基づいた明確な責務を負っています。また、こういった生き物を守っていくということは、正常に機能する山林の環境を守っていくのと同義であり、ひいては御宿の町民の皆さんの安全な生活環境の保全にもつながると考えられます。加えて、荒地・荒れ山に手を入れ、かつての美しい里山の風景を取り戻すための取組みは、移住促進や観光振興、次世代を担う子どもたちへの環境教育等、町民が心豊かに暮らしていくための資源となり、これからの御宿町の発展に大きく貢献していくものと確信します。

今回の視察を通して、「なぜ私たちはミヤコタナゴを保護すべきなのか」という事について、あらためて問い直し、再確認することができました。また、これを契機として、御宿町におけるミヤコタナゴ保全の取り組みが新たな一步を踏み出せるよう、引き続き議会としても研究と提言を続けていく所存です。

最後に、今回の視察に快く対応してくださいました観音崎自然博物館はじめ関係者の皆様並びに同行頂いた町関係職員の皆様に深く感謝を申し上げまして、視察報告とさせていただきます。

令和2年11月16日

教育民生委員長 北村 昭彦